子守っ子

アントン・チエーホフ

鈴木三重吉訳

夜、子守子のバルカは、きゝとれないくらゐの、ひくいこゑで、子守歌をうたひながら、赤ん坊のねてゐるゆり籠をゆすぶつてゐました。

「ねん〳〵よう。
ねん〳〵よう。」

神だなの前には、ランプが緑いろにともつてゐます。壁から壁へ、細いひもがかけわたしてあつて、赤ん坊の着物や、大きなズボンなどが、うす黒くぶらさがつてゐます。ランプのつるしてあるま上の天井が、まるく、大きく、緑いろにかゞやいて、赤ん坊の着物やズボンの影を、長く、ゆり籠の上や、うづくまつてゐる

バルカの肩の上に、おとしてゐます。

　火影がゆれると、天井のまるいあかるみやいろ〱なものゝ影が、まるで風にあふられたやうにゆらゆらします。部屋の中は息がつまるやうに静かで、スープと靴のにほひがしてゐます。

　赤ん坊がひい〱泣きます。あんまり泣きに泣いて、もう声もかれ〲になつてゐるのに、それでもまだ泣きやみません。いつになつたら泣きたりるのでせう。バルカはねむくて〱たまりません。

　頭はたれ下り、頸はつッぱつて苦しくなり、まぶたも唇も、動かなくなりました。顔はひからびて、石の

やうにこはゞつてゐます。頭が、まるでピンの頭ぐらゐにちゞこまつてしまつたやうな気がします。

「ねん〱よう。
ねん〱よう。」

バルカは、とぎれ〱にうたひました。そこいらでこほろぎがチル〱チル〱と鳴いてゐます。となりの部屋からは、親方とおかみさんのいびきがきこえます。

ランプがゆらぎました。緑いろのあかるみと物の影とが、あちこちと動きまはつて、バルカの動かない目の中に、そつとすべりこみました。すると、ねむりか

けてゐるバルカの頭の中には、さま〴〵なまぼろしがうかびました。――

空を、雲が赤ん坊のやうに泣きながら、きれ〴〵になつてとんでいきます。と、風がふいて来て、雲がきえて、こんどは、どろ〳〵にぬかつた広い路がみえ出しました。路の両がはには、つめたいもやをとほして岡がみえます。不意に、だれだか、袋をしよつた、影のやうな人が、グシヤッとぬかるみでころびました。

「どうしたの？」とバルカがきくと、

「ねむるんだ。ねむるんだよ。」と答へます。と、電線にとまつてゐる鳥が、赤ん坊のやうに泣きわめいて、

ねむつたその人をおこさうとします。

「ねん〱よう。
ねん〱よう。」

バルカはまたつぶやくやうにうたひます。すると、こんどは、じぶんが、まつ暗な、息のつまるやうな家の中にゐるのがみえて来ました。

床の上にはお父つぁんがねてゐます。お父つぁんはとてもひどいぜんそくで、息をするのもやつとです。むろん口もきけません。たゞ息をはくたびに、車のやうなひゞきがのどからもれるばかりです。

「ぐる、るゝ。ぐるゝゝ。ぐるゝゝ。」

お母さんは、お父つぁんが死にかけてゐるのをしらせに、地主さまのところへいきました。さつき、もうずつと前にいつたのに、いつになつたらかへるのでせう。バルカは、はたにねころんで、お父つぁんの「ぐるゝゝ」をきいてゐました。

だれか、戸口に馬車をとめました。地主さまのおやしきからよこして下さつたお医者さまです。お医者さまは、家の中へはいつてきました。まつ暗なので姿はみえません。その人がせきをするのと、戸のきしるのだけがきこえます。

「あかりをつけろよ。」

お医者さまがいひます。

「うゝ、ぐるゝゝ。ぐる〳〵。」とお父つぁんが答へます。お母さんがかへつて、マッチをさがしはじめました。

「先生さま、ぢきでごぜえます。ぢきでごぜえます。」

お母さんはかういひながら、ろうそくをともして、おもてへとび出して、先生と一しよにもどつて来ました。

「どんなぐあひだ。」お医者さまは、病人をのぞきこんで聞きました。

「おい、おかみさん、おまいたちは病人をほつぽり出

しておいたんだな。」
「へえ、いや、先生さま、もうおむかへが来るんでさあ、どつちみちもう長いことはありません。」
「馬鹿。おれがなほしてやるよ。」
「お願えしやすだ。へえ、どうもありがとうごぜえますだ。でも、どうせ死ななきやあなんねえだら、やつぱり死ななけきやあなりません。」
「これあ病院にいれなけれやあだめだよ。」
お医者さまは、診察をするといひました。
「今すぐいくといゝんだが、今夜はもうおそいな。病院ぢやみんなねてるかもしれない。まあいゝだらう。

心配するな。おれが今手紙をかいてやるからな。」

「あのう、先生さま。」と、お母さんがこまつたやうにいひました。

「うちにや馬がないんで。」

「馬がない？　うん、ぢやあ一頭かしてもらふやうに地主にはなしてやらう。」

お医者さまはかへります。あかりはけされました。バルカは、又お父つあんの「ぐる〳〵」をきくばかりです。半時間ほどもたつと戸口に馬車がつきました。こんどのは、お父つあんを病院につれていく馬車です。そしてお父つあんはいつてしまひました。

夜があけて、はれ〴〵とした朝が来ました。お母さんはお父つぁんのことがしんぱいなので、病院へいきました。

と、赤ん坊が泣いてゐます。そのそばで、だれかゞ歌をうたつてゐます。

「ねん〳〵よう。

ねん〳〵よう。」

お母さんがかへつて来ました。

「ゆんべはよかつたのに。」とお母さんは、すゝり泣きをしながらつぶやきます。

バルカは胸が一ぱいになつて、森の中へいつて、ひ

とりでしく〳〵泣きました。

「お父つぁんは死んでしまつた。おゝ、お父つぁん。」

ごつん、と頭をぶたれて、はつとバルカは目がさめました。目のまへには、親方が立つてゐます。

「やい、なにをしてやがるんだ。坊やが泣いてゐるぢやねえか。ねむるやつがあるか。」

　親方は、またぴしやんとバルカの頰をなぐりつけました。バルカは、またうと〳〵とゆり籠をゆすぶつて、子守歌をうたひ出します。部屋の中の影はぶる〳〵とふるへうごいて、バルカにまばたきをしてみせ、すぐに又バルカの頭の中にすべりこんで、まぼろしになり

ました。――

またどろ〳〵の、ぬかるみがみえて来ました。袋をしよつた人が、グシヤッところがつて、ぐう〳〵ねこんでしまひます。あゝ、あんなふうにごろつとねころんだならば。おゝ、ねむい、ねむい、ねむい。

だけど、お母さんがやつて来て、はやく〳〵とせかせます。バルカは、お母さんと、町へ仕事をさがしにいくのです。

「どうぞ一銭やつて下さい。」

お母さんは、あふ人ごとに言葉をかけます。

「その子をおくれよ。」

だれか知つてゐる人のやうな声がします。
「おい、その子をおくれつたら。」
はツと、バルカはとびおきました。おかみさんがそばに立つてにらみつけてゐます。
「おまいはねてゐたんだね。ばか。」
バルカはだまつててつツ立つてゐます。すると、部屋の中が、だん〳〵水いろにあかるんで来て、ズボンの影も、緑いろのランプの光も灰いろにうすれ、やがて、壁の中へすひこまれるやうに消えてしまひました。夜があけて来たのです。おかみさんは、赤ん坊をうけとつてお乳をのませると、胸のボタンをはめながらいひ

ました。
「まだ泣いてるよ、この子は。魔がさしてるんだよ。」
バルカは、赤ん坊をまたゆり籠に入れて、ゆすぶりはじめます。部屋の中には、もうなんの影もないので、まぼろしがのりうつゝてくることもありません・そのかはり、たゞ、ねむくてたまりません。バルカはねむ気をおひはらはうとして、籠のはしに頭をおしつけて頭で籠をゆすぶります。それでもすぐにまぶたがたるんで、頭がおもくなつて来ます。
「バルカ、ストーブをたきつけろい。」
戸のむかうから、親方がどなりつけます。さあ、い

よく〳〵バルカの仕事がはじまりました。バルカは、まきをとりに、物置へかけだします。それがうれしくてたまりません。かけたりあるいたりしてゐれば、じつとすわつてゐるときよりも、ねむくならないからです。まきをとつて来て火をおこしてゐると、こはばつてゐた顔があたゝかにほぐれ、目もはつきりとさめて来ました。

「バルカ、湯わかしをもつて来てよ。」

おかみさんがどなります。こんなふうに、あとからく〳〵、いろんな命令が出て来るのです。

「バルカ、親方の靴をおみがき。」

バルカは床に膝をついて靴をみがきはじめます。この大きな靴の中に頭をつッこんでぐう〱ねむつたら、どんないゝ気持でせう。かう思ふと、急に親方の靴がふくれあがつて部屋一ぱいにひろがりだしました。はつとして、バルカは靴ブラシをおとしました。けれど、すぐまた頭をふると、きよろきよろとあたりをみまはしました。なんにも大きくなりはしないぢやないかといつた顔つきです。

「バルカ、おもてをおはきよ。」

バルカは、おもてをはくと、もう一つ店のストーブに火をおこして、こんどは台所へかけていきました。

台所には、いろんな仕事がバルカをまちかまへてゐます。なかでも、ジャガイモの皮むきがひと仕事です。バルカは目がちら〳〵して、ナイフをすべりおとしました。すると、両そでをたくしあげた、体のがんじようなおかみさんが、頭がわれるやうにどなりつけます。それがすむと朝ごはんのお給仕をして、縫物をして、それからお午になり、夕方になります。

　だん〳〵、くらくなつていく窓をみてゐると、バルカは、なぜだかじぶんでもわからないなりに、ひとりでにほゝえまれて来ます。今にぐつすりねむれるよと、かう、くらやみが言つてくれるやうに思はれるからで

せうか。しかし、夕方は夕方で、またお客さまが大ぜい来ます。

「バルカ、お茶の支度をおし。」

おかみさんがどなります。湯わかしが小さいので、お客さまに、のみたりるだけお茶をのませるには、水を五へんもさしかへなければなりません。

「バルカ、ビールをかつてこい。」

「バルカ、酒をとつてこい。」

「コロップぬきはどこだい、バルカ。」

「にしんを洗ふんだつてばよ。早くおしよ。」

やつと、お客さまはかへりました。あかりはけされ、

親方もおかみさんも、寝床へはいつてしまひました。
「バルカ、ゆり籠をゆすぶりな。」
一ばんおしまひの命令です。
こほろぎがチル〳〵〳〵と鳴いてゐます。天井でぶる〳〵ふるへてゐる緑いろのあかるみ。ズボンや赤ん坊の着物の影。バルカは、そのうちに、またまぼろしをみるのでした。
「ねん〳〵よう。
ねん〳〵よう。」
バルカはつぶやくやうにうたひます。赤ん坊は泣いて泣いて、へと〳〵になつても泣きつゞけます。バル

カの頭の中には、又ぬかるみがあらはれました。袋を
しよつた人。お父つぁん。お母さん。
あゝ、ねむい。おゝ、ねむい。

底本：「日本児童文学大系　第一〇巻」ほるぷ出版
　　１９７８（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「鈴木三重吉童話全集　第八巻」文泉堂書店
　　１９７５（昭和50）年９月
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
　　１９３２（昭和７）年７月
入力：tatsuki
校正：浅原庸子
２００５年8月19日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。